

始聞しもん仏乘ぶつじよう義ぎ

建治四年（一二七八）二月二十八日。五十七歳。於身延。富木常忍宛。九紙完
 中山法華經寺藏。（定一四五二頁 原漢文）

青鳧七結、下州より甲州に送らる。其の御志悲母の第三年に相当る御孝養なり。

問う、「止観明静前代未聞」の心如何。答う、円頓止観なり。問う、円頓止観の意何。答う、法花三味の異名なり。問う、法花三味の心如何。答う、夫れ末代の凡夫、法花經を修行する意に二あり。一には就類種の開會、二には相對種の開會なり。問う、此の名は何れより出ずるか。答う、法花經の第三藥草喻品に云う「種相体性」の四字なり。其の四字の中に第一の種の一字に二あり。一には就類種、二には相對種なり。其の就類種とは釈に云く、「凡そ心有る者は是れ正因の種なり。随いて一句を聞くは是れ了因の種なり。低頭挙手は是れ縁因の種なり」等云云。其の相對種とは煩惱と業と苦との三道、其の当体を押えて法身と般若と解脱と稱する是なり。

其の中に就類種の一法は宗は法花經に有りと雖も、少分は又爾前の經々にも通ず。妙樂云く、「別教は唯就類の種有りて而も相對なし」と云云。此の釈の別教と云うは、本の別教には非ず。爾前の円、或は他師の円なり。又法花經の迹門の中「供養舍利」已下二十余行の法門も大体就類種の開會なり。問う、其の相對種の心は如何。答う、止観に云く、「云如なるか聞円の法なる。生死即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞く。三の名有りと雖も而も三の体無し。是れ一体なりと雖も而も三の名を立つ。是の三即ち一相にして其れ実に異有ること無し。法身が究竟なれば般若も解脱も亦究竟なり。般若が清淨なれば